

発掘調査の概要

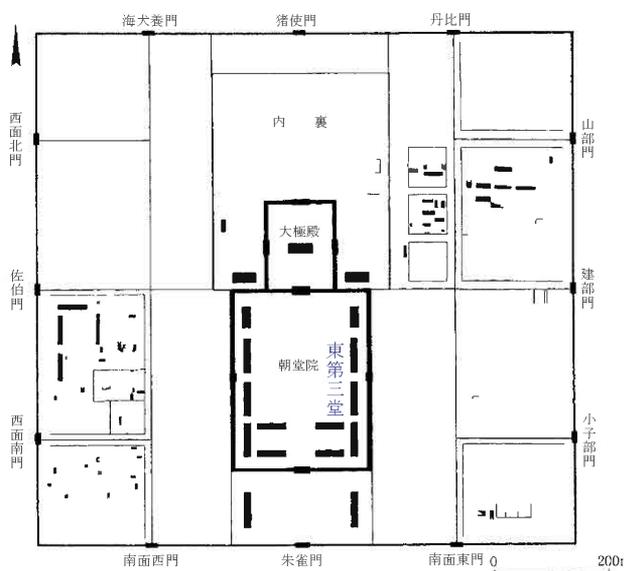
藤原宮朝堂院東第三堂（飛鳥藤原第132次）

藤原宮は持統8年（694）から和銅3年（710）までの16年間、持統・文武・元明の3代の天皇にわたって営まれた宮都です。今回の調査地は、国家的な政務や儀式・饗宴の場であった朝堂院地区。藤原宮の朝堂院は、南北320m、東西230mの広大な空間で、古代の宮都の中では最大規模を誇りました。朝堂院は複廊の回廊によって囲われ、内部には12の朝堂が左右対称に並び、前面には朝庭が広がっていました。

いま発掘している場所は、朝堂東第三堂の南半部です（下図参照）。12ある朝堂には役人たちの座が定められていました。平安時代の史料によれば、東第三堂は「承光堂」と呼ばれ、中務省・図書寮・陰陽寮に属する役人たちの座が設けられるとあります。

ところで、今回の発掘区では、すでに戦前に日本古文化研究所によって部分的な発掘がおこなわれています。今でこそ藤原宮の場所は周知のこととなっていますが、それも日本古文化研究所の精力的な発掘によるところが大きいのです。しかし、日本古文化研究所による発掘は柱想定位置をねらった限定的な調査であり、建物構造の細部などについては不明な点が多いというのが現状です。

そこで奈文研ではここ数年、藤原宮の大極殿院・朝堂院地区に6次にわたる再調査のメスを入れ、新事実を次々と明らかにしてきました。今回の調査もそうした流れにあるものです。



藤原宮復原図

約1000㎡の調査区を設定し、昨年12月のうちに重機による上土の掘削を終え、1月から本格的な調査に入りました。土を削ると、まず目につくのが、日本古文化研究所による調査の痕跡や、調査員の間で「ミゾミゾ」と呼ぶ中世以降の耕作溝です。それらを遺構カードに記録しながら掘り進めると、東第三堂が少しずつ姿を現してきます。礎石を据えるための根石・栗石の入った穴、建物から捨てられた瓦の堆積、朝庭部に敷かれた細かい砂などです。これらの状況から、東第三堂は瓦葺き礎石建ち建物で、屋根は切妻式、規模は南北15間（約62m）、東西4間（約12m）であったとみてよさそうです。今回は桁行9間分（約37m）が姿をみせており、なかなか見応えがあります。また、建物の棟通りにも根石・栗石が存在することを確認し、東第二堂と同じく床張りであった可能性がでてきました。

さらに、奈良時代から平安時代にかけての遺構も見逃せません。東第三堂の外側を中心に数多くの溝や、炭・土器を多量に含む巨大な上坑もしくは溝が広がり、建物がいくつか建っていたことが明らかになりつつあります。「忠富」と書かれた土器も出土しました。平城遷都後の藤原宮の土地利用のあり方を知る上で、貴重な情報が得られそうです。

真冬の現場で容赦なく吹きすさぶ風や雪。ふと思うのは、当時の役人たちのことです。元旦に天皇に拝礼をおこなう朝賀の儀では、役人たちは朝庭でじっと立っていなければなりません。我が身と重ね合わせながら、当時の役人たちに同情してしまいます。（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹）



古文化研究所の調査トレンチ掘削後の状況（北から）